

言葉の感覚を養い、伝え合いを楽しむための援助の工夫

— 絵本や詩の豊かな言葉との出会いを通して —

うるま市立与那城幼稚園教諭 岡田育子

I テーマ設定の理由

幼稚園教育要領領域「言葉」は、「幼児が日常生活の中で心を動かす体験を積み重ね、感じたことや考えたことを身近な人と伝え合う楽しさを味わう中での言葉の発達」をめざしており、教師の担う役割の重要性を示している。日本国語教育学会によると、「特に3歳頃から5歳頃までの間は、ことばを生活の中で使い、生活をことば化し、ことばを生活化して発達する時期」と記されている。そこで、幼児期は生活全般を通して言葉が発達していくと考え、生活体験の充実と豊かな言葉に出会う機会、身近な人とのかわりが大きな影響を与えるものと捉えた。豊かな言葉とは、楽しさ、美しさ、響き、リズムの面白さを表現するものであり、生活体験を通してイメージを内面化し、自分の思いや考えを表現する手段であると考え。さらに、幼児期から児童期にかけてのこの時期は、身近な人との言葉のやりとりを充実させることで、相手の話を理解したり、聞き手に伝わるように筋道を立てて話したりすることの体験の積み重ねが重要であると捉えた。

本学級の幼児の実態を見ると、明るく活発で制作や戸外遊びなど、様々な遊びに興味を持つ子が多い。一方で、自分の思いや考えをうまく言葉で表現できず遊びが持続しない、互いに考えを主張し折り合いをつけることができないなどの姿が見られた。そこで、幼児一人一人の思いやかわりをつなぐ援助をしてきたが、幼児同士で伝え合うことについては課題が残った。本市幼稚園具体的実践の「聞く・話す力を育むための保育実践」として、話し合いや発表する場の設定などにも取り組んでみた。これらの実践を振り返ると、学級で今日の出来事について話し合う場面で、幼児の感想が「楽しかった」「おもしろかった」などの断片的な表現であった。幼児の伝えたい思いを理解し言葉化することへの援助や、豊かな言葉の楽しさに気付かせることが課題であると考えた。

そこで、本研究では、伝え合いを楽しむための援助の工夫を視点に、豊かな言語表現である「絵本や詩」を日常的に生活に取り込むことにより、言葉の感覚が養われ、伝え合う楽しさを味わうことができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

なお、今後改訂される幼稚園教育要領（案）において、「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続」「体験と言葉の重視など子供や社会の変化に対応した幼稚園教育の充実」などが示された。新たに加えられた「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力の基礎」、「学びに向かう力・人間性」といった「資質・能力」の三つの柱や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目との関連についても念頭に置き、本研究を進めていきたい。

II 研究目標

遊びや生活の場面において、発達の時期や幼児の興味・関心に即した絵本や詩の活用を図ることで、言葉の感覚を養い、友達と言葉で伝え合う楽しさを味わえるような援助の工夫を探る。

III 研究仮説

1 基本仮説

遊びや生活の場面で、発達の時期や幼児の興味・関心に即した絵本や詩を活用し、意図的・計画的に環境構成や援助を工夫することによって、言葉の感覚を養い、友達とのかかわりの中で言葉による伝え合いを楽しむことができるであろう。

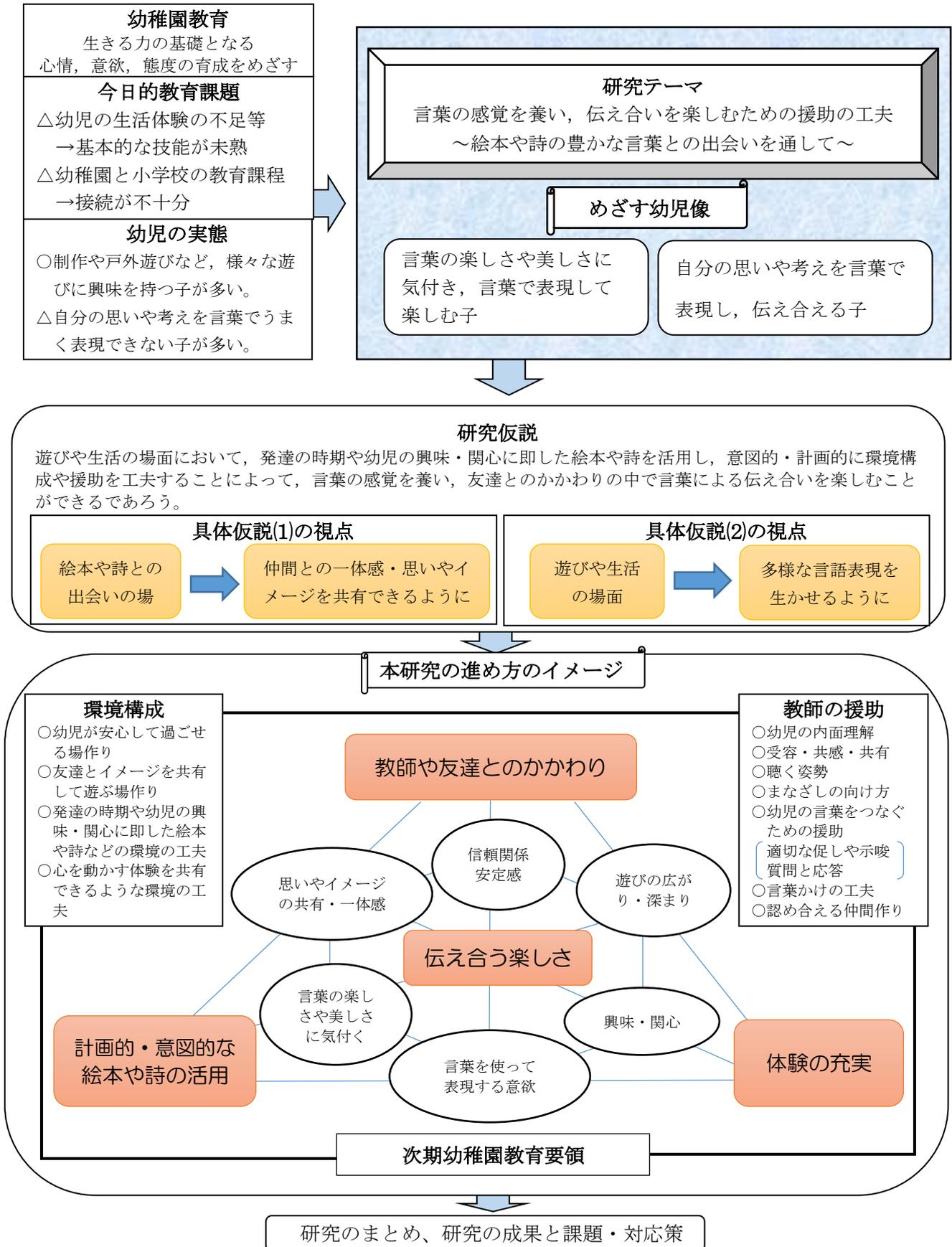
2 具体仮説

(1) 絵本や詩の豊かな言語表現や想像の世界との出会いの場において、学級の仲間と一体感を感じ、思いやイメージを共有できるように環境構成や援助を工夫することで、言葉で表現する意欲が高ま

るであろう。

(2) 遊びや生活の場面で、絵本や詩の言葉の楽しさや美しさ、響きやリズムの面白さなどの多様な言語表現を生かせるように環境構成や援助を工夫することで、言葉による伝え合いを楽しむようになるであろう。

IV 研究の全体構想図



V 理論研究

1 幼児期の「言葉」

(1) 領域「言葉」

【領域「言葉」】(幼稚園教育要領より)

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことなどを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

領域「言葉」では、教師や友達と安定感をもったかかわりの中で、言葉の発達を促すものであり自己表現の意欲と応答性のあるかかわりが重要である。言葉のみを取り出して指導するのではなく心を動かす体験の充実と教師や友達とのかかわりによる発達をめざしていることから、領域「人間関係」と「言葉」は深く関連していると捉えた。

(2) 言葉の感覚を養うためには

幼稚園教育要領解説によると、言葉の感覚を養うための幼児の経験として、「教師や友達と一緒に行動したりやりとりしたりすることを通して、次第に日常生活に必要な言葉が分かるようになっていく」こと、「絵本を見たり、物語を聞いたりして楽しみ、そこで想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いなどを教師や友達と共有したりする」ことが大切であるとされている。言葉は、身近な人とのかかわりを通して獲得されていくことから、乳幼児期に身近な親しい人とのやりとりは、言語能力を促進する上で重要となってくる。幼稚園では、教師や友達との応答性のあるかかわりがこれに当たる。また、幼児は友達と一緒に絵本などを聞く場面を通して、一体感を感じるとともに、思いやイメージの共有が図られ、聞く楽しさを味わうことができる。

日常の遊びの中での直接体験と、絵本などから膨らませた想像の世界とを結び付けることで、具体的なイメージが蓄積され、さらに言葉でのやりとりが充実することにより、断片的であった話し言葉が次第に相手に伝わるような話し言葉になっていく。そして、順序立てて話すことは、文脈で話を理解するなど思考を促す力となり、さらに自分の思いを全体場で話すことのできる二次的ことばの土台となる。

岡本夏木(2005)は、幼児期の言語活動が、特定の親しい人と一対一的・対面会話的關係の中で展開されるとし、そのような言葉を「一次のことば」と述べた。そして、「二次のことば」は、不特定多数の他者に対して話すという一方向的談話形式であり、「一次のことば」の上に「二次のことば」が加わり、双方は重なり合って発達していくと示した。「まず一次のことばの世界が充実した内容をもって確立され、その土台にしっかり根づいた形で二次のことばの世界が形成されてこそ、子どもは次の新たな世界を拓いてゆける」と結論付けた。このことから、幼児期から児童期にかけての言語発達は、一次のことばの充実を基盤に一次のことばを二次のことばにつないでいくことが重要であると考えられる。

(3) 言葉の発達過程

「事例で学ぶ保育内容領域言葉」(無藤隆監修 2012)において、豊かな言葉を生み出す基盤について、「その場の雰囲気や相手の呼吸、相手の動きなど、からだを通して伝わってくる感覚を意識して、それを感じ取っていくことは、とても大事なことである。からだを通して人とつながれたという体験は、もっと深く人とつながろう、いろいろな人とつながろうという活力を生み出していき人と人のかかわりを広げていく確かな基盤になっていくとともに、豊かな言葉を生み出す基盤もなっていく」ということから、人とのかかわりは言語によるコミュニケーションだけでなく行動・

表情・身振りなど、相手の雰囲気を感じ取りつながった感覚が大切である。乳児期からこのようなやりとりを通して、「聞く・話す・伝え合う・思考する」力が発達し、さらに言葉は豊かになっていくと捉える。

表1は、「保育所保育指針」、「保育内容『言葉』言葉とふれあい、言葉で育つ」（大越和孝他編著 2006）、「事例で学ぶ保育内容 領域言葉」（無藤隆監修 2012）、「ことばと発達」（岡本夏木 1985）を参考に、言葉の発達過程を自分なりにまとめた。発達過程においては同年齢の乳幼児の均一的な発達の基準ではなく、一人一人の乳幼児の発達の道筋として捉えるべきものと考えている。また、幼稚園教育の対象年齢が満3歳～小学校就学の始期に達するまでの幼児のため、「誕生から2歳ごろ」（省略）、「幼稚園教育対象年齢（3歳～6歳ごろ）」に分け、その中でも特に検証対象の5歳児については、「5歳～6歳ごろ」（表1）をⅠ期～Ⅳ期に細分化して表した。

2 言葉による伝え合い

(1) 伝え合いとは

榎沢良彦（2012）は、言葉の機能には「コミュニケーションの道具としての言葉」「思考の道具としての言葉」「『表現』としての言葉」があるとしている。また、「『表現』としての言葉」について、「言葉は私たちの精神世界の表現であり、私たちは言葉によりそれを表現することで、精神世界をより豊かなものにするのである。詩にしる、小説にしる、広い意味での言語芸術は精神世界の表現である。…（中略）『言葉による伝え合い』を単にコミュニケーションの問題としてではなく、『表現としての話し言葉』の育ちという広い地平に立って考えたとき、子どもの育つ土台が見えてくる」と述べている。

「言葉による伝え合い」は、遊びや生活の中で楽しさ・不思議さ・驚き・悲しみ・悔しさなどの様々な気持ちを抱いたり、絵本や詩の豊かな言葉に触れたりする体験が心にイメージとして蓄えられ、身近な人とのかかわりの中で自分の思いや考えを表現することであると考えられる。伝え合うためには、「安心して話せる人の存在、話したくなるできごとやものの存在」が肝要である。

(2) 本テーマと幼稚園教育要領5領域の関連

本テーマ「言葉の感覚を養い、伝え合いを楽しむための援助の工夫」と5領域がどのように関連しているかについて、各領域の「ねらい」や「内容」をキーワードとして示したものである。

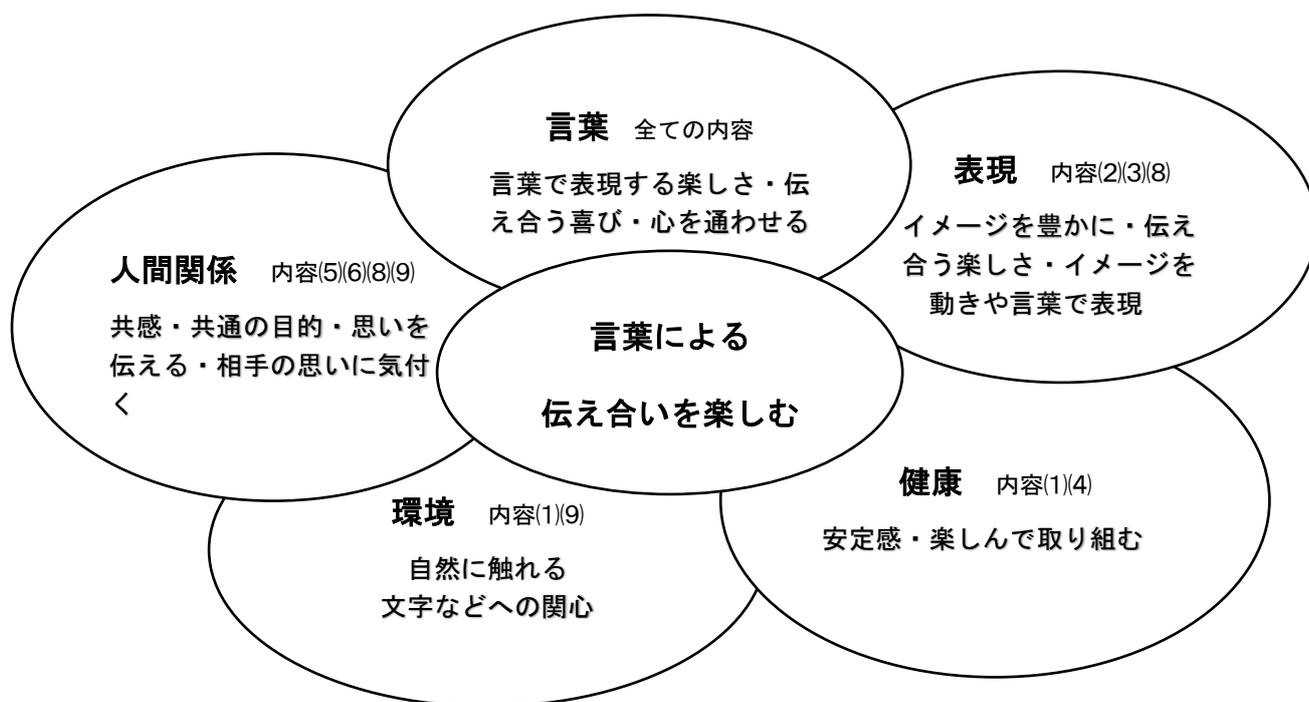


図1 本テーマと幼稚園教育要領5領域との関連

表1 3歳頃～6歳ごろまでの言葉の発達過程

	3歳ごろ	4歳ごろ	5歳～6歳ごろ			
発達の姿	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な運動機能が伸びる。 食事、排泄、衣類の着脱等もほぼ自立できるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 全身のバランスをとる能力が発達し、体の動きが巧みになる。 	I期 4月～5月上旬	II期 5月中～8月	III期 9月～12月	IV期 1月～3月
			<ul style="list-style-type: none"> 新しい環境に戸惑いが見られるが、教師とのかかわりの中で安定していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 周囲の人やものへの興味や関心が広がり、友達とかかわって遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 共通の目的に向かって、友達と相談したり工夫したりしながら遊びを進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達と目的を持って様々な遊びや活動に意欲的に取り組み、自信を持って生活を進める。
聞く・話す・伝え合う過程	話し言葉の基礎ができ、盛んに質問する等、知的興味や関心が高まる。	「仲間に入れて」「いいよ」等が言える。	自分たちできまりを作る。			
	平行遊びではあるが、友達とのかかわりが多くなる。	自分の思ったことや感じたことを言葉で表し教師や友達との会話を楽しむ。	言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向って集団で行動したりすることが増える。		文脈に依存した「一次のことば」に加えて、文脈から独立した「二次のことば」が発達していく。	
	思いや考えを伝える手段として、言葉を操れるようになる。 例)「トガ カワイカラ ミズヲ ム」	伝えたいことを順序立てて話す。				
	場面に合った会話ができる。	話し手を見て話を聞く			仲間の意思を大切にしようとし、話し合っって役割を分担する等、協同遊びやごっこ遊びを行い、継続して取り組むようになる。	
	ごっこ遊び、なりきり、〇〇のふり等して、言葉のやりとりを楽しむ。	絵本等を読んでもらい、その内容が分かり、イメージを広げて楽しむ。				
	質問に自分なりに考えて答える。	うなずきながら、相手の話に興味を持って聞く。		物語絵本を集中して聞く。		
思考する過程	生活の中で形、色、遠近、数、高低等、比較を喜ぶ。	「こうありたい」という自己像や「できない」といった自分なりの見通しを持ち、人の目を意識するようになるがゆえに自分を発揮できなくなることがある。		自分なりに考えて判断したり、批判したりする力が生まれ、けんかを自分たちで解決しようとする。		
	予想や意図、期待を持って行動できるようになる。	納得がいくまで友達に働きかけたり、独り言をつぶやき考えたりしながら難しい工作に挑戦する等、言葉を駆使して思うところを成し遂げようとする。		互いに相手を許したり、異なる考えを認めたりする。		
	象徴機能や観察力を発揮して、遊びの内容に発展性が見られるようになる。	自然等の身近な自然に積極的にかかわり、様々なものの特性を知り、それらとのかかわり方や遊び方を体得していく。		先行経験から、自信や予想、見通しを立てる力が育ち意欲が旺盛になる。		
	身近な動植物に興味や関心を持つ。	身近な動植物の世話のお手伝いを行い、愛情を持つ。	飼育動物の世話をする。小動物の観察、セミやバッタ等の身近な昆虫に触れて遊ぶ。その中で、生態等に興味を持ち、調べる。	思考力や認識力も高まり、自然事象や社会事象、文字等への興味や関心も深まっていく。		
				様々な知識や経験を生かし、創意工夫を重ね、遊びを発展させる。		
留意点	幼児をよく見て、言葉にならない心の声を受け止める。	遊びのイメージを共有できるように橋渡しをし、遊びの発展に向けた投げかけをする。	<ul style="list-style-type: none"> 生活を楽しむための言葉を意図的に使う。 伝え合い、通じ合うことの楽しさを感じられるようにする。 遊びに至るプロセスに丁寧ににかかわり、相手を認め合えるようにつないでいく。 			
			メタ認知ができる「第2次認知革命」。 (メタ認知とは、自分の行動・考え方・性格などを別の立場から見て認識する活動をいう。)			

(3) 言葉による伝え合いを楽しむための教師の援助

「事例で学ぶ保育内容領域言葉」（無藤隆監修 2012）によると、「絵本や物語の読み聞かせ場面では、子どもは様々な未知の世界を想像したり、主人公に自分を重ねて楽しんだり、悲しんだり、感動したりする。それらの気持ちを一緒に聞いている仲間と共有することができ、気持ちや感想を伝え合うことを導いている。全体場面でのお話や話し合いやゲームでも、一緒に問題を考えることによって、仲間の意見を聞いて修正しながら考えをまとめ、気持ちを共有していく体験をしているのである。これらを通して、子どもは言葉の感覚を養い、状況に合った言葉を使うようになるとともに、保育者や仲間と言葉で伝え合ってやりとりする楽しさを感じるようになる」とある。発達の時期に即し、計画的・意図的な環境を構成し、幼児が興味・関心を持った遊びや生活の中で、友達とかかわり合える状況を作ることにより、幼児同士が互いにイメージを共有し、伝え合い・考え合い・学び合いを深めることができると考える。言葉による伝え合いを楽しむための根底には、教師や友達との信頼関係や安定感が必要である。

榎沢良彦（2012）の「幼児の豊かな言語表現を育むための要点」を参考に、言葉による伝え合いを楽しむための教師の援助について、表2にまとめた。

表2 言葉による伝え合いを楽しむための教師の援助

教師の援助	豊かな言語表現の育ち
体験から生まれる幼児の多様な言語表現を大切にし、受け止める。	体験は幼児を内発的に動機付け、表現へと向かわせる。主体的に意味を生み出していくことで、幼児の表現力は育つ。
表現することの楽しさを味わうことを大切にし、共感する。	リズムカルな言葉や言い回しの面白い言葉を交わすとき、幼児の中から表現意欲が溢れ出している。一緒に楽しむ教師や友達がいることが表現意欲を高める。
幼児同士の言語表現の場を作り、共有できるようにする。	幼児が友達の多様な表現に触れ、それに対して応答することで、豊かな言語世界を共有していく。
幼児の意欲を引き出すために「聴く」姿勢を持ち、応答する。	教師が幼児と「私—あなた」の関係に立って向き合い、幼児の話に関心をもって「聴く」ことで、幼児はさらに意欲的に話をする。同時に、幼児は教師からの応答（話）を注意深く聴こうとする。さらに、他児の話も聴こうとする。
一対多の関係においても、「あなたに話しかける」という姿勢を持ち、幼児一人一人にまなざしを向ける。	教師が幼児集団の一員となるとき、そこには「私たち」の関係が生まれ、幼児は、一人一人に向けられた教師のまなざしに出会い、教師と同行することで、自ずから互いにまなざしを向け合うようになる。

3 保育の中での絵本や詩の活用

保育の場では、絵本や物語、紙芝居など多様な児童文化財が活用されている。豊かな言葉や想像上の世界と出会い、自分の経験と結び付けたり、思いを巡らせたりする体験が得られる。さらに、教師や友達と一緒に見たり聞いたりする中で、一体感を感じるとともに、思いやイメージの共有を図ることができる。本研究では、絵本や詩を通して、教師や友達と言葉の楽しさや美しさを共有することにより、言葉で表現する意欲を高め、伝え合う楽しさを味わえるようにしていきたいと考えた。

(1) 絵本の役割

大越和孝（2006）は、絵本について「楽しい言葉、リズムカルな言葉、子どもの体験を引き出し共感させる言葉、確かなイメージを結ぶ言葉によって、絵に助けられつつ、子どもは心の中に物語の世界を描いていくことができ、未知の体験を自分のものにしていく。…（中略）絵本は、子どもの想像力を補い、広げていくのに大きな役割をもっている」とし、幼児期に絵本の読み聞かせを

通して、豊かな想像力を身に付けることの大切さを述べている。そして、様々な言語表現に触れることができるのも絵本の魅力である。

例えば、絵本「はやく あいたいな」(五味太郎)の中で、同じ意味で異なった言葉「いそいで」「あわてて」などが用いられている。絵本「とんとん どんどん」(中川ひろたか)では、「ぎらぎら」「きらきら」といった音が似ているけれども、全く違う様子を表す擬態語を分かりやすく表現している。教師は、絵本の中にある、このような豊かな言語表現や物語の意図を理解し、活用することが求められている。

(2) 詩の役割

幼稚園教育要領解説には、「言葉はただ単に、意味や内容を伝えるだけのものではない。声として発せられた音声の響きやリズムには、音としての楽しさや美しさがある。(中略)言葉を覚えていく幼児期は、このような言葉の音をもつ楽しさや美しさに気付くようになる時期でもある」と示されている。擬態語や擬音語などのオノマトペは、リズムや音、情景を感じることができるものであり、詩の中で多用されている。詩は、感じたことや考えたことを心のままに、リズムをもつ言語形式で豊かに表現したものであり、繰り返しの音(リズム)の心地よさを友達との会話に取り入れて楽しむようになると思われる。幼児の生活に合わせて、興味や関心に即した詩を意図的に遊びや生活の中に取り入れていくことにより、幼児の言語表現は豊かになっていくものとする。その際幼児のイメージをより明確にしていくために、ペープサートや絵カードといった視覚的教材を効果的に活用する方法も考えられる。

(3) 豊かな言葉と心を動かす体験

豊かな言葉とは、幼児の思いや考えを表現した言葉と絵本や詩などに出てくる多様な言語表現であるとする。

全国国公立幼稚園長会(2013)「遊びや生活を通して、子どもの豊かな言葉をはぐくむ調査研究報告書Ⅱ」の中で幼児期に育みたい豊かな言葉を右記のように示している。幼児が遊びや生活の中で、楽しさ・悔しさ・不思議さ・美しさといった情動を伴うとき、心を動かす体験となる。このような心を動かす体験から生まれる幼児の思いや考えを表現した言葉は、身近な人と言葉による伝え合いを楽しむ中で発達し、さらに言葉に対する感覚も豊かになっていくと捉える。

表3 幼児期に育みたい豊かな言葉

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・幼児の内なる思いや考え、感動があふれている言葉 ・自分の思いや考えを周囲に向けて自分なりに表現し、伝えようとする言葉 ・他者に対する優しさやいたわりの気持ちを表現している言葉 ・やりとりを重ね、他者の思いに共感し伝え合いが深まる言葉 ・場や相手に応じて、自分の気持ちや考えの表現の仕方を工夫している言葉 |
|--|

表4 心を動かす体験

①感動的な体験；自然の美しさや不思議さに触れたとき、楽しい活動に参加したとき、絵本・物語・詩から様々な思いを味わうとき
②感情的な体験；友達ともめたとき、失敗したときに悔しい思いをしたときなど
③思考を働かせる体験；新たなことを思いついたとき、何かに気付いたとき、疑問を感じたとき

幼稚園において、教師や友達との安定したかかわりを基盤に、絵本や詩の豊かな言葉との出会いの中でイメージを広げ、心を動かす体験の充実を図ることで、幼児が言葉で伝え合う楽しさを味わえるようになることを考える。

4 幼稚園教育要領改訂と本テーマとの関連(改訂を視野に)

(1) 「資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

「教育課程中央審議会幼児教育部会における審議の取りまとめ」の「資質・能力の三つの柱に沿った、幼児教育において育みたい資質・能力の整理イメージ」と『『アクティブ・ラーニング』を考える』(教育課程研究会編著)を基に自分なりに構想図にまとめたものである。

☆は、「教育課程中央審議会幼児教育部会における審議の取りまとめ」の中の「五領域の『ねらい及び内容』及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』から便宜的に分けた」ものであり、本テーマと特に関連する項目は、★太字で示した。

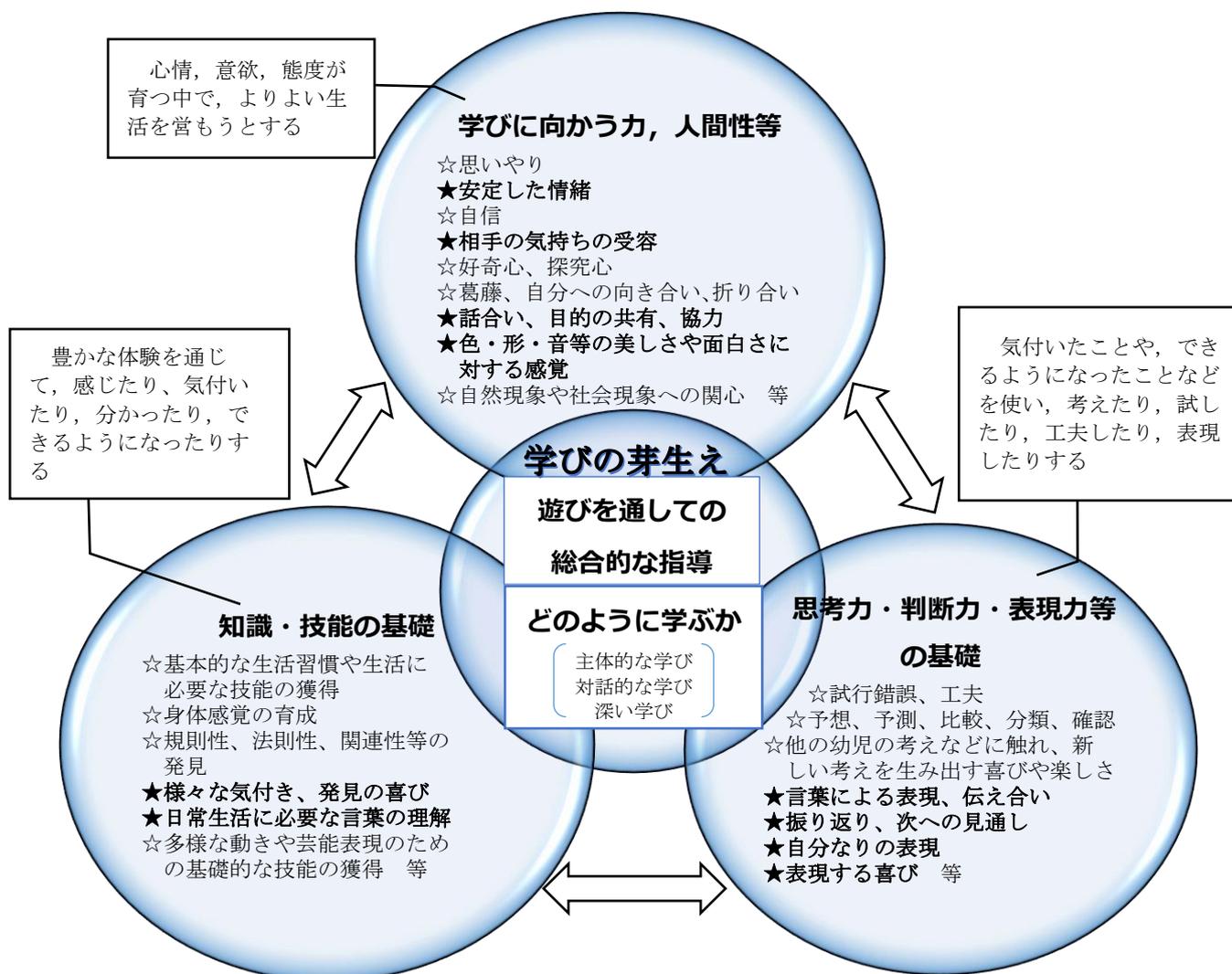


図2 次期幼稚園教育要領「資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

(2) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿『言葉による伝え合い』との関連

次期幼稚園教育要領の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿『言葉による伝え合い』では、

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

と示され、下線部分の「豊かな言葉や表現を身に付け」という部分が加わった。次期幼稚園教育要領において、「幼児の発達を踏まえた言語環境を整え、言語活動の充実を図ること」と明記されていることから、言葉のみを取り出して指導するのではなく、幼児を取り巻く様々な「人・もの・こと」といった環境構成や、「豊かな言葉や表現を身に付ける」ための援助の工夫が大切であると考える。

VI 指導の実際・仮説の検証

1 検証保育Ⅰ（11月7日～11月15日）

- (1) 活動名 「ゲームランド（昔遊び・言葉遊び）を楽しもう！」
 (2) ねらい ◎友達とイメージを共有し遊ぶ中で、様々な言葉のやりとりの楽しさや言葉を使って遊ぶ面白さを味わう。

(3) 活動設定の理由

言葉は身近な人とのかかわりの中で獲得されていくことから、領域「言葉」と「人間関係」は深く関連していると考えられる。幼稚園教育要領「言葉」のねらいでは「(1)自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう」、「人間関係」の内容では「(8)友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする」と示されている。幼稚園において、言葉による伝え合いができるようになるためには、教師や友達とのかかわりの中で、自分の思いや考えが相手に伝わる嬉しさや相手の話が分かる喜びを感じ、活動が共有される満足感を味わうことが必要であると考えられる。

そこで、11月18日の園行事「祖父母お招き会」に向けて、園全体で昔遊びなどに取り組んでいくことを踏まえ、これらの遊びとの連続性を図りながら、計画的に保育に取り入れている絵本や詩とを組み合わせ、言葉の育ちにつながるように保育を計画してきた。本時の検証保育では、昔遊びと詩や絵カードの言葉遊びを「ゲームランド」とし、店員やお客の役になり遊ぶ中で、様々な幼児とかかわる体験となり、言葉でやりとりする楽しさや言葉を使って遊ぶ面白さを味わえるのではないかと考え、本活動を設定した。

① 幼児の実態〈省略〉

② 教材観

昔遊びや言葉遊びを「ゲームランド」と名付け、店員とお客などの役になり、様々な幼児とかかわる活動を通して、以下のような幼児の育ちが考えられる。

ア 言葉により共通のイメージを持って遊びを進める。

イ 自分達で役割を分担したり決まりを作ったりして遊び、言葉でのやりとりを楽しむことができる。

ウ 自分の思い通りにいかない葛藤体験を通して、折り合いをつけることを学ぶ。

エ 言葉を使って遊ぶことで、言葉の表現が豊かになり、思考力の芽生えが培われる。

オ 場面に応じた言葉が使えるようになる。

③ 指導観〈省略〉

(4) 保育計画

時	月 日	◎ねらい	○保育活動 ☆教材 〔 絵本, 詩, 歌, 言葉遊びなど 〕	☆教師の援助 ★環境構成 【うるま市実践3項目】 ①聞く・話す力を育てるための保育実践 ②好奇心・探究心を育む環境構成 ③規範意識の芽生えを培う保育実践
1	11月7日 (月)	◎祖父母お招き会について自分なりの考えを話したり、先生や友達の話の聞いたりし、共通のイメージを持つ。 ◎絵本を通して、様々な昔遊びがあることを知り、興味を持つ。	○集会 〔 祖父母お招き会で、どんなことをするか話し合い、自分のやりたい遊びを選ぶ。 〕 ※遊びは9種類で、6グループにする。 ①あやとり・お手玉 ②けん玉・折り紙 ③ビー玉・おはじき ④お花屋さん ⑤劇場ごっこ（エイサー等） ⑥銀行ごっこ ☆絵本；『しん太の昔遊び』	☆集会が始まる前の好きな遊びの時間に、幼児との会話の中で「祖父母お招き会」についての話題を取り上げ、やりたい遊びのイメージが持てるようにしていく。【実践3項目①】 ☆集会の中で、自分のやりたい遊びを決められずにいる子へは具体的な遊びの内容を伝えることで、自分の思いを言葉で表現できるようにする。 【実践3項目①】 ☆昔遊びに関する絵本の読み聞かせを行なうことで、遊びの種類や遊び方に興味を持てるようにする。 【実践3項目①】

2	11月10日 (木)	<p>◎自分の考えを話したり、友達の話の聞いたりしながら、遊びを進める。</p> <p>◎言葉遊びや詩を通して、言葉のリズムや面白い表現に興味を持つ。</p>	<p>○昔遊びやエイサーなど、それぞれのグループに分かれて遊びに必要な物を考えたり、作ったりする。</p> <p>✳言葉遊び；『絵カードクイズ』</p> <p>✳詩；『あいうえおってどんな顔』</p> <p>✳絵本；『しん太の昔遊び』</p>	<p>☆それぞれの遊びの場について話し合い、場所を固定することで、遊びが深まるようにしていく。</p> <p>【実践3項目②】</p> <p>☆絵カードクイズでは、幼児自身でヒントを考え、言葉で伝える楽しさを感じられるようにする。【実践3項目①】</p> <p>☆詩の中に出てくる様々な表情をペーパサートにし、それを使って言葉のリズムや表現を楽しめるようにする。</p> <p>【実践3項目②】</p> <p>☆絵本を通して、昔遊びのお店の様子や遊び方にも興味を持てるようにする。</p> <p>【実践3項目①】</p>
3	11月11日 (金)	<p>◎互いに考えを出し合って、昔遊びやお店ごっこなどの遊びを進める。</p> <p>◎言葉遊びや詩を通して、言葉のリズムや面白い表現に興味を持つ。</p>	<p>○友達と一緒に昔遊びやお店ごっこを楽しむ。</p> <p>✳言葉遊び；『絵カードクイズ』</p> <p>✳詩；『あいうえおってどんな顔』</p> <p>✳絵本；『いらっしやい いらっしやーい』</p>	<p>☆それぞれの昔遊びの遊び方について、グループの仲間とイメージが共有されているか確かめ、必要に応じてアドバイスする。【実践3項目③】</p> <p>☆絵カードクイズを通して、「静かにしないと聞こえない」「順番に言おう」などの幼児のつぶやきや考えを生かしながら、友達の話の最後まで聞こうとする態度が育つようにする。</p> <p>【実践3項目①】</p> <p>★様々な表情のペーパサートを用意し遊びの中で活用できるようにする。</p> <p>☆『あいうえおってどんな顔』の言葉遊びの中で、言語表現の楽しさを味わえるように、遊びの場を工夫する。</p> <p>【実践3項目②】</p> <p>☆絵本を通して、お店ごっこのイメージを広げ、場に応じた言葉に気付けるようにする。【実践3項目②】</p>
4	11月14日 (月)	<p>◎友達とイメージを共有し遊ぶ中で、様々な言葉のやりとりの楽しさや言葉を使って遊ぶ面白さを味わう。</p>	<p>○ゲームランドを楽しもう・店員とお客の役になり、昔遊びなどの各コーナーでゲームをする。</p> <p>✳言葉遊び；『絵カードクイズ』</p> <p>✳詩；『あいうえおってどんな顔』</p> <p>✳絵本；『けんだまめいじん おみやげに』</p>	<p>★学級のひととときに、それぞれの昔遊びが楽しめるように場や時間を工夫する。【実践3項目②】</p> <p>☆ゲームランド(昔遊び・言葉遊び)の場で、店員とお客の役割に分かれて遊ぶことで、友達と言葉でのやりとりを楽しめるようにする。【実践3項目①】</p> <p>☆絵カードクイズを通して、相手に分かるようにヒントを考えたり、伝えたりするなど、多様な言葉の表現に気付かせるような言葉かけを工夫する。</p> <p>【実践3項目①】</p> <p>☆絵本を通して、「けん玉」遊びの面白さや粘り強く挑戦する大切さについて感じられるようにする。【実践3項目①】</p>
5 本時	11月15日 (火)	<p>◎友達とイメージを共有し遊ぶ中で、様々な言葉のやりとりの楽しさや言葉を使って遊ぶ面白さを味わう。</p>	<p>○ゲームランドを楽しもう・店員とお客の役になり、昔遊びなどの各コーナーでゲームをする。</p> <p>✳言葉遊び；『絵カードクイズ』</p> <p>✳詩；『あいうえおってどんな顔』</p>	<p>☆ゲームランド(昔遊び)の場で、店員とお客の役割に分かれて遊ぶことで、友達と言葉でのやりとりを楽しめるようにする。【実践3項目①】</p> <p>☆『あいうえおってどんな顔』の言葉遊びの中で、幼児が表現した面白い言葉を取り上げ、多様な言語表現に興味や関心が持てるようにする。</p> <p>【実践3項目②】</p>

絵本や詩の場面での幼児の姿

- 絵本「しん太の昔遊び」の読み聞かせの途中、「この遊び（めんこ）、知ってる」や「おはじき、今（遊びで）やってるね〜」「へえ、トンボ取りってすごい」など反応する姿が見られ、様々な昔遊びに興味を持っている様子が見られた。
- 絵本「いっらしやーい いっらしやい」の読み聞かせでは、お話の世界に入っているようで、絵本の場面に合わせて笑ったり、じっと見たりと幼児の表情に変化が見られた。
- 詩に出てくる 15 種類の表情をペープサートで視覚化したことで、様々な表情の言語表現を楽しみ、笑ったり身を乗り出したりして、興味津々で見ている。

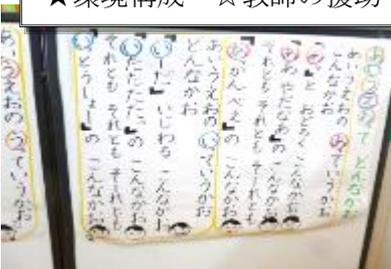
教師の読み取り及び援助

- ☞絵本の中の想像の世界に思いを巡らしているようである。そのイメージを現実の遊びに生かせるように幼児の思いや考えを引き出していく。
- ☞詩の豊かな言語表現の楽しさを感じているので、遊びの中でペープサートを使って遊べる環境を構成する。

【具体仮説(2)】

遊びや生活の場面で、絵本や詩の言葉の楽しさや美しさ、響きやリズムの面白さなどの多様な言語表現を生かせるように環境構成や援助を工夫することで、言葉による伝え合いを楽しむようになるであろう。

★環境構成 ☆教師の援助



- ★ペープサートを披露するための間仕切りとして利用できるように、低いホワイトボードを置き、幼児の目線に合わせて詩を掲示する。
- ★15種類のペープサートは、ひらがな毎に分類し、幼児が遊びに取り入れられるように配置する。
- ☆昔遊びのお店の看板を作るときや、遊びのルールを決めるときなど、幼児の考えに対して「聴く」姿勢を持ち、応答しながら具体的にイメージ化させ、遊びが展開していくように援助する。

遊びの場面での幼児の姿



詩を活用したペープサートの劇場ごっこ

ペープサートの遊びを『あいうえおスペシャル』にしよう！と幼児同士で決め、役割を分担したりして、友達に披露し楽しんでいた。この『あいうえおスペシャル』では、1つの詩を5名の幼児が順番にペープサートで表現し、お客に披露する遊びであった。演じる側の幼児の「ドキドキする」というつぶやきや見る側の幼児の「まだかなあ」と笑顔で座って待っている姿から、遊びの一体感を感じている様子が見られた。「もうすぐ始まりますよ」とお客に声をかけ、言葉でやりとりする姿も見られた。

お金は、この中に入れよう



けん玉屋さん

ここにビー玉を当てるんだよ



ビー玉屋さん

100円ですよ



お手玉屋さん

『けん玉屋さん』ではレジ係がお金を管理する姿や『ビー玉屋さん』では遊び方を説明する姿、『お手玉屋さん』では「100円ですよ」と接客する姿など、店員役の幼児同士で役割を分担し、友達と言葉でやりとりをしながら遊びを進める姿が見られ、場に応じて様々な言葉が表現されていた。

☞教師の読み取り及び援助

- ☞店員とお客の役に分かれて遊ぶ中で、普段かかわりの少ない友達とも言葉でやりとりする姿が見られたことから、今後も遊びが広がり深まるような環境構成や援助を工夫していく。
- ☞ペープサート劇場では、店員が一方的にペープサートを披露する遊びだったので、演じる側・見る側双方が響き合えるような遊びになるように、言葉の表現遊びを充実させていく。



(2) 考察

幼児の遊びや生活の姿を捉え、関連する絵本や詩を活用し、それらの言語表現や想像したことを遊びに生かせるように環境構成や援助を工夫することで、友達とイメージが共有され、言葉のやりとりが活発になっていくことが分かった。体験が充実することで、人とかかわろうとする意欲が高まると考える。検証保育Ⅰの課題としては、言葉の楽しさや美しさを、より多くの幼児が味わえるようにすることである。

3 検証保育Ⅱ（1月16日～1月30日）

(1) 活動名 「学級のオリジナルカルタを作ろう！」

(2) 活動設定の理由

幼稚園教育要領領域「言葉」の内容の取り扱いにおいて、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」と示されている。これまでの保育において、絵本や詩を計画的・意図的に活用し、遊びや生活に生かせるように環境構成や援助を工夫してきたことにより、言葉の響きや面白さなどに気付き、言葉のやりとりを楽しむ姿が見られるようになった。3学期に入り、カルタやすごろくなどの正月遊びでは、文字や数に興味や関心を持っている様子が見え始める。一方で、学級の約20%の幼児が自分の名前以外のひらがなを読めないという実態がある。小学校就学に向けた3学期に、文字や数に興味や関心を持たせることは、小学校への円滑な接続のため、喫緊の課題として重要であると考えられる。また、今期の言葉の発達として、状況文脈に支えられた親しい人との対話である「一次的事物」に加えて、多数に向けて一方的に伝達する「二次的事物」へと発達していくことから、学級全体に向けて発表する場を設けることは、発達の時期に適していると考えられる。

そこで、本時までの保育活動の中で、幼児同士で考えを出し合ってグループ毎にカルタ作りを行い、本時では、学級全体に向けてグループで作ったカルタを発表することで、考えたことを言葉にする楽しさを感じたり、他児の言語表現に触れたりするなど言葉に対する感覚を養い、さらに文字や数への興味や関心を高めることができるのではないかと考え、本活動を設定した。

① 幼児の姿〈省略〉

② 教材観

本時までの保育活動の中で、入園してからの各月の行事や遊びを想起させ、共通のイメージを持たせながら、グループ毎に考えを出し合ってカルタを作る活動をする。本時では、誕生月毎のグループで作ったカルタを発表し合うことで、以下のような幼児の育ちが考えられる。

ア 4月から月毎に、園の行事や遊びを追体験することができる。

イ 誕生月毎のグループで取り組むことで、生まれた季節や月に興味や関心を持つ。

ウ 各グループの発表を聞くことで、様々な言語表現を知り、思考力の芽生えを培う。

エ 他児の言語表現に触れ、言葉の楽しさや面白さに気付くことで、言葉に対する感覚を養う。

③ 指導観〈省略〉

(3) 保育計画

時	月 日	◎ねらい ○保育活動	✿教材 〔絵本, 詩, 歌, 言葉遊び〕 リトミックなど	☆教師の援助 ★環境構成 【うるま市実践3項目】 ①聞く・話す力を育てるための保育実践 ②好奇心・探究心を育む環境構成 ③規範意識の芽生えを培う保育実践
1	1月16日 (月)	◎園生活を振り返り、思ったことや考えたことを話し合い、互いの成長を喜び合う。 ○園生活を振り返る。	✿リトミック 「歩く・跳ぶ・飛び跳ねる」 ✿詩 「あいうえおにぎり」 ✿絵本 「大きくなるっていうことは」 「ぎょうじのえほん」	☆絵本を通して、各月の行事を想起させ、体験してきたことを話し合い、成長を喜び合えるようにする。 【実践3項目①】 ☆オリジナルカルタを作るきっかけ作りをし、カルタを作る意欲が持てるようにする。 【実践3項目②】
2	1月17日 (火)	◎自分の考えを伝えたり、友達の話の話を聞いたりしながら、カルタの言葉を考え合うことで、様々な言葉の表現を楽しむ。 ○誕生日毎にカルタ作りをする。	✿リトミック ✿詩 「あいうえおにぎり」 ✿絵本 「しりとりにあいうえお」	★カルタの読み札や絵札用の画用紙やボール紙を準備する。 【実践3項目②】 ☆誕生月の幼児が1, 2名の場合は前月や次月とグループを作るように配慮する。【実践3項目③】 ☆グループでカルタの言葉を考え合う際、互いの考えを認め合って、進められるようにする。【実践3項目③】 ☆幼児なりの豊かな言語表現を大切にす。【実践3項目①】 ☆読み札は誰でも読めるように、教師が鉛筆書きをし、幼児はペンでなぞって一緒に作成する。 【実践3項目③】 ☆季節や保育活動に適した絵本を精選し、読み聞かせを行なうことで、イメージを豊かにする。 【実践3項目①】 ★読み聞かせをした絵本は、学級の絵本コーナーに置き、幼児が読み返せるように環境構成する。 【実践3項目②】
3	1月18日 (水)		✿歌「すうじのうた」 ✿詩 「あいうえおにぎり」 ✿絵本 「あいうえおうさま」	
4	1月19日 (木)		✿リトミック ✿歌「すうじのうた」 ✿詩 「あいうえおにぎり」 ✿絵本 「かぜのひのおはなし」	
5	1月23日 (月)		✿リトミック ✿詩 「あいうえおにぎり」 ✿絵本 「フィフィのみぎひだり」	
6	1月24日 (火) 検証保育		◎誕生日毎のグループで考えたカルタを発表し合うことで、他児の言語表現に触れ、言葉による表現の楽しさを味わう。	
7	1月30日 (月)	◎オリジナルカルタを使って、皆で遊ぶ楽しさを味わう。	✿詩 「いちがっ にがっ さんがっ」 ✿絵本 「そんなときなんていう？」	☆チーム対抗でチームから一人ずつカルタ取りをするルールを取り入れ、全員がカルタ遊びに参加できるようにする。 【実践3項目③】

(4) 本時の展開（「幼児の姿」省略）

平成 29 年 1 月 24 日（火） ばら組 33 名（男児 15 名 女児 18 名） 保育者 岡田 育子			
ねらい	◎誕生月毎のグループで考えたカルタを発表し合うことで、他児の言語表現に触れ、言葉による表現の楽しさを味わう。		
時間	○予想される幼児の活動	☆教師の援助 ★環境構成【実践 3 項目】	評価項目
10:00	○リトミックをする （○リトミックを傍観する子がいる） ○詩を楽しむ ・誕生月毎のグループで座る ・詩「あいうえおにぎり」の掛け合いをする 〔○言葉の掛け合いをせず、他児の掛け合う様子を聞いている子がいる〕	☆教師の指示をよく聞き、リズムに合わせて、身体表現を楽しめるようにする。【実践 3 項目③】 ☆詩の掛け合いをすることで、言葉のリズムに興味・関心が持てるようにする。【実践 3 項目②】 ★誕生月毎のグループで考えた読み札や絵札を準備しておく。【実践 3 項目③】 ☆グループ毎に読み札を発表する際、絵札を見せて視覚化することで、他のグループの発表に興味を持てるようにする。【実践 3 項目①】 ☆順序立てて発表することや聞き手に伝わる声の大きさを意識できるようにし、必要に応じて言葉かけをする。【実践 3 項目①】	・詩に興味を持っているか。 ・教師の話聞いてるか。 ・グループの発表に参加しているか。 ・他児の発表を最後まで聞いているか。 ・教師や友達の話を聞いているか。
10:20	○グループ毎に発表する ・発表の仕方について教師の話を聞く ・4 月から順に発表する 〔○集中力が続かず落ち着かない子がいる〕	☆読み札の様々な言語表現について、幼児のつぶやきや感想を引き出すようにする。【実践 3 項目①】 ☆皆で考えたオリジナルカルタを使って遊ぶことを伝え、次の活動への期待感を持たせる。【実践 3 項目②】	
10:35	○話し合いをする ・思ったことや考えたことを話したり、友達の話の話を聞いたりする ・次の活動に期待を持つ		
10:45			
評価	◎誕生月毎のグループで考えたカルタを発表し合うことで、他児の言語表現に触れ、言葉による表現の楽しさを味わうことができたか。		

4 仮説の検証（検証保育Ⅱ）

(1) 具体仮説の検証

【具体仮説(1)】

絵本や詩の豊かな言語表現や想像の世界との出会いの場において、学級の仲間と一体感を感じ、思いやイメージを共有できるように環境構成や援助を工夫することで、言葉で表現する意欲が高まるであろう。

絵本や詩のあらすじ

〈 絵 本 〉

「大きくなるっていうことは」

（作 中川ひろたか）

「大きくなるって、どういうこと？」という疑問について、幼児自身にとって身近な事例をいくつも挙げて答えていく内容である。「大きくなるっていうことは」の部分は繰り返し表現されている。

「あいうえおうさま」

（作 寺村輝夫）

「あいうえおうさま、あさの あいさつ。あくびを あんぐり、ああおはよう」から始まり、1 ページ 4 行ずつ短い文章で、50 音順にゆかいな話が表現されている。

身近な食べ物から連想される擬態語や擬音語の言語表現がある。言葉のリズムや響きの面白さを味わうことができる詩

む た す さ あ か ぺ あ あ
 ； し ち る し つ あ き ろ いう え いう え
 (省 や つ す す あ く と っ え ね いう え
 略) む て る せ つ た け と た お じ め お
 ； し や と た そ た べ こ ろ た お に ぎ り
 ； た か べ め て っ て ぎ り 正
 た べ つ ん け け り 一

★環境構成 ☆教師の援助

- ☆絵本「大きくなるっていうことは」の読み聞かせを通して、繰り返しの言語表現を楽しみながら自分の成長についても考えられるようにしていく。
- ☆文字への興味が高まっているので、ひらがな 50 音とお話の楽しさを味わえる絵本を精選し、読み聞かせを行なう。「あいうえおうさま」や「しりとりあいうえお」など
- ★幼児が見えやすいように目の高さに合わせて、黒板に詩を掲示しておく。
- ☆教師も一緒に詩を楽しむことで、言葉のリズムや響きの面白さを共感していく。
- ☆皆の前で詩を朗読したいという幼児の思いを受容し、表現する場を設けることで、満足感を味わえるようにしていく。このような積極的な幼児の姿を他児に見せることで刺激を与え、言葉で表現する意欲を高めていけるようにする。
- ☆学級全員で詩の掛け合いをすることで、言葉のリズムを楽しみ、一体感を感じられるようにする。

絵本や詩の場面での幼児の姿



詩の掛け合いの場面

「先生、(詩を) もう覚えたよ」という幼児のつぶやきを受容し、詩の掛け合いをリードしてくれるか言葉かけしてみると、15名の幼児が進んで皆の前に出てきた。リード係15名が詩の冒頭の「あいうえおにぎり」を言うと、他児が「ばくっと たべて」と掛け合いが続いた。まだ詩を覚えていない幼児もいるが、分かるところは一緒に口ずさんだりしている。遊びや生活の様々な場面で、教師が「あいうえおにぎり」と詩の冒頭を口ずさむと、幼児がその続きを自然に返してくる。響き合う一体感が面白いようである。

- 絵本「大きくなるっていうことは」の読み聞かせ後、自分の成長を感じたようで、「上履きも小さくなった」という発言があった。その言葉を受容し、「足が大きくなったんだね」と言葉かけすると、自分の足をじっと見つめたり、友達の足の方が大きいことに気付いたりする幼児の姿が見られた。
- 絵本「あいうえおうさま」や「しりとりあいうえお」では、言葉のリズムや表現の楽しさを感じているようで、友達と顔を見合わせて笑い合ったりしている。

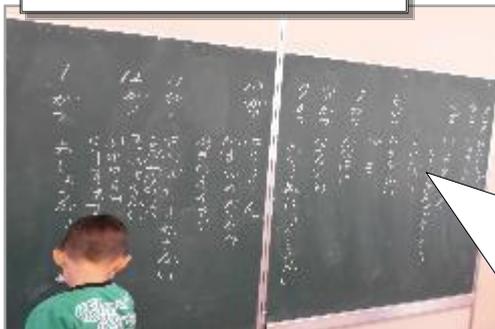
☞教師の読み取り及び援助

- ☞10月に詩を活用したときには、皆の前で詩の朗読をしたいという幼児が4名であったが、今回は15名だった。皆の前に出なくても、幼児なりに詩の言語表現を楽しんでいる姿も見られたことから、言葉の楽しさを味わい、言葉で表現する意欲が高まっていると思われる。
- ☞絵本を通して、自分の成長を実感していることから、6歳になった(なる)喜びを共感しながら、これまでの園生活を振り返ることで、学級の仲間と思い出を共有・共感できるような手立てを工夫する。

【具体仮説(2)】

遊びや生活の場面で、絵本や詩の言葉の楽しさや美しさ、響きやリズムの面白さなどの多様な言語表現を生かせるように環境構成や援助を工夫することで、言葉による伝え合いを楽しむようになるであろう。

★環境構成 ☆教師の援助



- ☆絵本「大きくなるっていることは」の読み聞かせ後、入園してからの園生活について話し合い、どんな出来事があったか、幼児から言葉を引き出していく。
- ★幼児の発言を板書し、可視化するとともに、文字への興味・関心へつなげる。
- ☆話し合いの時には、一人一人にまなざしを向け、参加意識を高められるようにする。
- ☆カルタ遊びを教師も一緒に楽しみながら、言葉のリズムの感覚を養うようにする。



★話し合い後、園生活の思い出をイメージしやすいように、写真で可視化する。

遊びや生活の場面での幼児の姿

11月にあやはし館へ行ったよね

大きい舟や小さい舟があったね



11月生まれのグループ。写真を見ながら、グループで読み札の文章を考えているところ。互いに考えを出し合い、1つの文章にまとめることができ、満足感を味わっていた。

グループでのカルタ作り

(絵札を)先に塗りたい



8月生まれのグループ。3枚目のカルタを作っている時に、「(絵札を自分から)先に塗りたい」と言い合いになる場面。しばらく見守っていると、幼児同士で話し合って解決し、交替で絵札を塗り始めた。

ここで、交替しよう



4月生まれのグループ。入園式のカルタと入学に向けたカルタを作っていた。読み札の文章が決まり、交替で書き始めた。友達が書いているのをじっと見守っている姿が見られた。

グループでのカルタ発表

発表の仕方について問いかけると、「〇月の発表ですって言う」「優しい声で」といった幼児の考えが出た。



4月生まれのグループ。「1年生になったら、友達100人できるかな」という文章を読み上げている。発表後の話し合いで「1年生のカルタを作っていたから、すごい」という他児からの感想があった。



「けん玉 かんかん 頭にごつつんこ」と豊かな表現だったので、イメージしやすかったのか、聞き手から笑い声が聞こえた。



友達の発表を見つめている。4月から3月までカルタの発表をしたので、発表の時間が長くなってしまった。後半、集中力が途切れる幼児もいた。

準備はいいですか？

オリジナルカルタを使って遊ぶ



グループ対抗のカルタ取りを行なった。各チーム一人ずつ出て交替でカルタを取るルールである。ひらがなが読めない幼児も含め、学級全員で最後まで参加し楽しんでいった。同じチームの幼児を一生懸命応援する姿が見られ、「チーム違うけど、仲間だよな！」と対戦相手に声をかける場面もあった。終わった後、字の読めないA児が「今度は違うチームでやろう」と皆の前で提案していた。

☞教師の読み取り及び援助

- ☞園生活の思い出について話し合ったことを板書したり、写真で可視化したりすることで、イメージが共有され、言葉のやりとりが活発になった。言葉でやりとりを重ねる中で、自分の思いや考えを表現し伝え合う姿が見られたことから、イメージの共有が大切であると感じた。今後も、遊びの見通しを持った環境構成の充実を図っていく。
- ☞自分たちで作ったカルタで遊ぶことによって、ひらがなに興味がなかった幼児にも刺激となり、次の遊びへの期待となった。好きな遊びの時間に作ったカルタを使えるように、取り出しやすく配置する。

(2) 考察

詩の言語表現を楽しみ、自分の声で伝える楽しさを味わっていることから、このような多様な言語表現が次第に獲得され、場に応じた言葉や自己を表現するための手段として活用されていくものであると考える。幼児なりの言語表現を受容し、伝えたい思いを言葉化することにより、幼児の言葉による表現意欲が高まると思われる。皆の前で発表するという二次的ことばの要素を含んだ活動は、この時期の幼児にとって重要であることが分かった。何を育てたいか、何が育とうとしているかを見極め、幼児の実態に照らし合わせながら、保育を行っていくことの大切さを改めて感じた。

5 抽出児の考察

【B児の10月はじめの姿】

人とのかかわりに不安感があるため、入園するまで、家族以外の人とかかわることがほとんどなかったB児。自己を表出することが難しく、困り感を伝えられない。友達とかかわりは少しずつ見られるようになってきたが、受動的である。遊びや生活を通して、B児の心の動きを読み取る。

検証保育Ⅰ 「昔遊びのお店ごっこの場面」



お店の前に並ぶが、何も言えないまま立ちすくんでいたB児。B児と応答しながら、伝えたいことを教師が代弁する。



店員がB児に話しかけても黙ってしまうので、教師が仲介しながら、やりとりをする。教師も一緒にけん玉で遊ぶうちに、笑顔になった。



傍で見ていた幼児がB児に声をかけている。けん玉が終わると、2人で手をつなぎ、次のお店へ向かう。嬉しそうな表情である。

【☞教師の読み取り及び援助】

- ☞表情や身振りで伝える姿が見られたので、友達とかかわりたい気持ちはあると思われる。
- ☞B児の興味・関心を読み取り、言葉で表現する楽しさを味わえるようにしていく。

検証保育Ⅱ 「詩の掛け合いの場面」

皆の前で詩をリードしたい人がいるか言葉かけをしたとき、進んで前に出てきたB児。15名の仲間と一緒に、詩をリードする役をしていた。詩の中のどこが好きか問いかけると、「詩の最後の『わいうえおもちも んっとたべた』のところが面白かった」と話していた。



【B児の考察】

学級の仲間と一緒に、詩の朗読をすることで、言葉の楽しさやリズムの面白さを味わい、言葉で表現する意欲につながったと思われる。また、共通の目的に向かって友達と一緒に取り組むことで、自分の思いや考えを伝えようとする気持ちが高まってきたと考える。

【C児の10月はじめの姿】

自分の思いや考えをうまく言葉で伝えられず、黙ってしまうことがしばしば見られる。初めて経験することに抵抗感があるC児。遊びや生活を通して、C児の心の動きを読み取る。

検証保育Ⅰ 「お店の店員」



C児は、「ビー玉屋さん」の店員。始めのうちは、4名で接客をしていたため、他児がお客とやりとりしているのを緊張した表情で見ていた。



ゲームのルールを教えるために、2名の幼児が席を外した。C児とD児が接客係として残った。不安気な表情である。しばらくして、D児と共に「いらっしゃいませ」「こちらどうぞ」と接客する姿が見られた。

【教師の読み取り及び援助】

- ☞お店の準備や値段を決める話し合いに積極的に参加していたことから、店員をしたいという気持ちを持っていると思われる。始めのうちは表情が硬いが、「いらっしゃいませ」の言葉にお客が来てくれたことが嬉しかったようで笑顔を見せていた。
- ☞今後も言葉でやりとりする楽しさや自分の言葉が伝わる喜びを味わえるようにしていく。

検証保育Ⅱ 「カルタを発表する場面」

カルタの発表では、友達と一緒に皆の前に出て、笑顔で発表していた。



【教師の読み取り】

- ☞カルタ作りするとき、「豆まき」のカルタを「カシャカシャ」と表現していたC児。C児なりの言語表現を大切に受け止め、どんな時に「カシャカシャ」という音がするのか応答しながら言葉化していくことにした。箱の中の豆の音を表現したいことが分かり、「豆まき、カシャカシャ箱の中」という読み札となった。学級全体の場でもC児なりの豊かな表現を褒めたことで自信を持ったと思われる。

1月 遊びの場面

友達と4名で学校ごっこをしている様子。C児が教師役で、「よく聞いてくださいね」と役になりきって遊んでいた。



よく聞いてくださいね

はい

【C児の考察】

C児の内面を理解し、C児なりの言語表現を受容・共感・応答してきたことで、自分の思いや考えを言葉で表現するようになり、友達とのかかわりの中で、言葉による伝え合いを楽しめるようになったと考える。

6 実践事例（11月29日～12月6日）

詩の豊かな言語表現と食べる体験を通して

【詩の内容】

・	か	ぼ	り	は	ほ	も	た
・	り	り	り	り	こ	も	べ
・	か	ぼ	り	は	ほ	も	も
・	り	り	り	り	こ	も	の
(省略)	ら	き	た	だ	さ	な	
・	っ	ゅ	く	い	っ	か	
・	き	う	あ	こ	ま	え	
・	よ	り	ん	ん	い	い	
・	う				も	と	
					し	し	
					お	お	



【教師の援助】

詩「たべもの」の言葉を絵カードにして視覚化することで、詩のイメージを共有し、オノマトペの響きを楽しめるようにする。

幼児のつぶやき

たくあんって食べたことない！

たくあんの試食

食感・匂い・色など諸感覚を働かせて体験することで言葉のやりとりが活発になった。

「ぱりぱり」じゃなくて「こりこり」だよ！

黄色いからパイナップルみたいだね！

たくあんって、大根だよ

体験と言葉がつながることで、実感を伴った言葉になる

VII 研究の成果、課題・対応策

1 成果

- (1) 遊びや生活と関連した絵本や詩を意図的・計画的に活用し、遊びが充実するように環境構成や援助を工夫することで、友達とイメージが共有され、言葉で伝え合って楽しむようになった。
- (2) 絵本や詩の言葉の楽しさや美しさを教師や友達と一緒に楽しむことにより、言葉を使って表現する意欲が高まることが分かった。
- (3) 詩の豊かな表現を楽しむ幼児の姿から、発達の時期や興味・関心に即した詩を活用することで、言葉の感覚が養われることが確認できた。

2 課題・対応策

- (1) 学級の場面を中心とした研究となったので、今後は遊びや生活のあらゆる場面で、豊かな言語表現を教師が意図的に取り入れ、言葉を楽しむ環境構成や援助を工夫していく。
- (2) 絵本や詩の多様な言葉を生活体験と結び付ける機会が少なかったため、言葉と体験のつながりを意識した保育実践を行っていく。

〈参考・引用文献〉

- 教育課程研究会 2016 『『アクティブ・ラーニング』を考える』 東洋館出版社
- 幼児教育じほう 2016.11 『特集 豊かな言葉を育む』 全国国公立幼稚園・子ども園長会事務局「時報部」
- 全国国公立幼稚園長会 2013 『遊びや生活を通して、子どもの豊かな言葉をはぐくむ調査研究報告書Ⅱ』
- 初等教育資料 2012.5 榎沢良彦 論説『幼児期における言葉による伝え合いの指導』 文部科学省教育課程課編
- 無藤隆監修 2012 『事例で学ぶ保育内容領域言葉』 萌文書林
- 文部科学省 平成20年10月 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
- 厚生労働省 平成20年3月 『保育所保育指針』
- 大越和孝他編著 2006 『保育内容『言葉』言葉とふれあい、言葉で育つ』 東洋館出版社
- 岡本夏木 2005 『幼児期』 岩波新書
- 今井和子編著 1995 『私の中の子どもと詩』 ひとなる書房
- 日本語教育学会 1992 『生活のことばからの保育』 東洋館出版社
- 岡本夏木 1985 『ことばと発達』 岩波新書